

EurekaXIV

六年制通信 No.6 令和8年5月15日(金)号

受かるべくして受かっている

この時期に前年度の『合格体験記』が出来上がります。毎年読むのが楽しみで、生徒諸君の顔を浮かべながら読んでいると毎回同じような感想を抱きます。この体験記には書き手の性格が色濃く出ています。皆、正直に書いていることがわかります。受験勉強という強烈な実体験が如何に強く心に残るかということもよくわかります。中学の時は、あるいは4年生までは、5年生までは、ほとんど勉強していませんでしたという記述が毎回出てきますが、これはもちろん6年生の夏明けの激しい勉強に比べて、という意味です。本人は気づいていないかもしれませんが、受験前の勉強が苛烈過ぎてその印象が残ったまま書いているのですね。ですから、直近の勉強に比べればあの頃は何もしていなかった、というわけです。そう言いたい気持ちはわかります。しかし、本当に5年生までほとんど勉強しなかったとしたら、決して志望校に合格することはありません。ですから体験記をよく読むと、ちゃんと授業の予習・復習をしていることや定期テストの準備はしていることなどが書いてあります。

「毎回同じような感想を抱きます」と書きましたが、二つあります。一つは生徒諸君にとって一つの大きな岐路が文理選択であるということです。この文系か理系かという分け方は非常に問題があると私は思っていますが、現行仕方ないことでしょう。ここで生徒諸君は数年後に進む道を考えることになります。理学部か、文学部か、法学部か、医学部か、それぞれに合格するために求められるものが違ってきます。小論文があるのか、面接があるのか、大学によって違うでしょう。それらに向き合うのが文理選択の時期です。そして、そこから先は後戻りができません。もちろん三重中学校に入学する前から医学部とか薬学部とか決めている生徒もいます。しかし、多くの生徒は文理選択の時期に進路に向き合うはずです。文理選択に伴い共通テストの受験科目を決め、並行授業の取り方も決めなくてはなりません。もう、自動的に受験モードに入っていくわけです。如何に大切な時期かわかりますよね。

それからもう一つ、体験記が教えてくれるのは、合格する生徒は計画的に独習をしているということです。当たり前ですけど。もちろん、迷いもあるしうまくいかないこともあって、その度に自分の性格に直面し悩みます。それでも、受かるべくして受かっているという印象を私は持ちます。独習をしている、つまり独習ができるという時点で、基礎力はできているということです。受験期を前にして途方に暮れるような学力ではないということです。地道なこと、例えば英単語を覚えるといったこと、それらから逃げなかった証拠です。後輩たちに英検準一級に挑戦することを勧めています。こ

れ一つ取り上げても、彼らが多くの時間を勉強につぎ込んできたことがわかります。

これは体験記からというよりは私の体感ですが、合格する生徒の特徴として先生(担任の先生をはじめとして)とのコミュニケーションがしっかりとれていることが挙げられると思います。私、よく先生方とA君やBさんの進路希望や模試の成績などについて話をするのですが、先生が非常に詳しく話してくれる生徒はまず安心ですね。今まだ迷っていますとか、はっきりしないとか、曖昧な言葉が返ってくると心配だね。合格する生徒のことは先生がちゃんと把握している、よく相談しているといった印象があります。君たちも参考にしてください。

また、これも毎年のことですが、自分の、ついネガティブなことばかり考えてしまう後ろ向きの性格と戦っている生徒がたくさんいますね。しかし、程度の差こそあれ誰もが同じような経験を持っていると思います。何もかも順調に行くわけないですからね。青春期の君たちは、精神的な面で自分には人並みの強靱さがないのではないかと悩むこともあるでしょう。しかし、人間は人並みでない部分を持つということは、すばらしいことである。そのことが、ものを考えるばねになるのです。

現行の入試問題については言いたいことが山ほどありますが、受験勉強そのものは実に公平に君たちの前にあると思います。君たちの手の中にあると言っていると思います。受験勉強に対してどういう態度をとるか、それが他の誰でもない君だけの将来に大きく影響します。さて、君はどのような態度をとるのでしょうか。

今週のおすすめ

・柚月裕子 『あしたの君へ』 (文春文庫)

カンボちゃん。家庭裁判所調査官に任官する前に家庭裁判所調査官補として二年間の研修を行わなければならない。官補、でカンボちゃん。先輩がからかってそう呼ぶらしい。主人公は望月大地。自分がこの仕事に向いているかどうか悩みながらも、一つ一つの事例に丁寧に向き合ううちに調査官として成長をしていく物語です。こういう成長物語が好きですね、私は。そして君たちにも是非読んでほしいと思っています。トルストイの『アンナ・カレーニナ』の冒頭、「幸せな家庭はすべて似通っているが、不幸な家庭は、それぞれ異なった理由で不幸である」との洞察が納得いくと思います。

五つの物語です。家庭裁判所に送られてくる案件ですから少年犯罪もあれば離婚による親権の調停もあります。それぞれの事案の背景を十分に調査して裁判官に報告するのが調査官の役目です。心を開かない相手に悪戦苦闘しながら事件の背景を探っていくうちに見えてくる、それぞれの人間の抱えるエゴであったり責任感であったり、それらが子どもであればあるほど読んでいて切なくなります。この本の解説は実際の家庭裁判所調査官によるものです。柚月さんは検事佐方貞人シリーズも執筆していますが、法曹関係者からの念入りな取材が行われたことが十分に伝わってきます。ちなみに柚月さん、将棋もお好きなようで、「盤上の向日葵」も読んでみて下さい。そのうち藤井聡太竜王名人を主人公に何か書いてくれませんかね。

BGMは バグルス の ラジオ・スターの悲劇 でした…。